

# 我が子の発達障害に対する父親の 受容プロセスの検討

○中村圭佑・金平希・中野美奈

(福山大学大学院人間科学研究科・福山大学人間文化学部心理学科)

## 目的

本研究の目的は、主に成人期の発達障害をもつ子どもの父親の障害受容プロセスを検討するために、現在に至るまでの子どもの障害との向き合い方の変化のプロセスを木下(2003)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて明らかにすることであった。さらに、障害受容に関与する要因を探索的に検討した。

## 方法

**調査対象者および調査期間** 2023年5月～2023年9月に、発達障害の親の会あるいは療育施設、放課後等デイサービス等に所属している発達障害の診断を持つ子ども(平均年齢18.86歳、 $SD=6.81$ )の父親へ研究への協力を依頼し、同意の得られた7名の父親に対して半構造化面接を行った。(平均年齢52.43歳、 $SD=7.19$ )。

**調査内容** 調査対象者とその配偶者の年齢、就労形態、子どもの年齢と性別・診断名を尋ねた。分析テーマは「父親の現在に至るまでの我が子の障害との向き合い方のプロセス」であった。インタビューガイドは山根(2012)、小川・高木(2018)を参考に、「子どもの障害に気付いたエピソード」、「子どもの障害の診断がなされたエピソード」、「子どもの障害について現在に至るまでの感情・考え・行動の変化のプロセス」、「障がいのある子どもを持つことによる現在に至るまでの自分・自分と子ども、自分とパートナーの関係性の変化」について尋ねるものであった。

**倫理的配慮** 本研究は、福山大学学術研究倫理審査委員会の審査を受け承認(通知番号:2023-H-10号)された後に調査を実施した。

## 結果と考察

55個の概念、15個のカテゴリー、3個の大カテゴリーが生成された。なお、文中の【】は概念、<>はカテゴリー、《》は大カテゴリーを表す。<違和感を持つ>ことや、<他者からの指摘>が、父親にとって我が子の障害の可能性や他児と

の違いに気付くきっかけとなっていた。そのような《我が子の違いの気づき》を経た後、<障害と受け止められない>状況が確認された。このような背景には、<障害に対する無知>が関係していた。一方、我が子の状態に対して【半信半疑】となる父親や、【妻任せ】となる父親もいた。多くの父親は<障害と受け止められない>あるいは、【半信半疑】の状態から、自らまたは【妻主導の働きかけ】により<情報収集>を行い、発達障害に関する知識を身に着けていた。このような、発達障害に関する情報を調べ、正しい知識を身に着けることは、我が子の障害を受け入れる準備となる可能性が示唆された。実際に、情報収集を行った父親は、診断直後に<どん底>を感じる者もいたが、その後は【前向きな支援の決意】や【納得せざるを得ない】といったように、診断結果を一応は受け止め、<診断への納得>ができていた。

<診断直後のどん底>を経験した者、<診断への納得>を一旦した者であっても、多くの父親は常に子どもの発達や将来に【付きまとう不安】を抱えており、特に子どものライフイベントごとに《落ち込みと希望の循環》を経験していた。葛藤を何度も経験し、循環の中では<外部の支援>や<妻と二人三脚>で葛藤を乗り越えていくことが助けになっていた。このような過程を経て、父親は我が子の発達障害と<折り合いをつける>ことができるようになり、《障害の恩恵》を感じている父親もいた。この過程はまさに、母親の障害受容プロセス研究で多数示されている、子どもの障害に対する肯定と否定の感情を繰り返す螺旋モデル(山根, 2010; 中田, 1995)と一致していると言える。

このようなプロセスの背景に<常に有るもの>として、子どもに対する【無条件の愛】、【付きまとう不安】が全ての父親に見られた。

なお、これらのプロセスの中で、特に<情報収集>を行うこと、<妻と二人三脚>で葛藤を乗り越えていくこと、<外部の支援>を受けることが、受容の要因として重要であることが示唆された。